

2024 年度 一般入試

第 2 回

国語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

― 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」の家は、明治時代から続く「靴の往来堂^{あうらいどう}」というオーダーメイドシューズの店である。「わたし」は、おじいちゃん（四代目マエストロ）、おばあちゃん（店長）、おかあさん（事務室長）と共に住んでいる。

工房^{こうぼう}に行くために事務所かららせん階段をおりていくと、店のほうからカランコロンとドアベルの音が聞こえてきた。店長があわててマエストロを呼びに来た。

「また来たわよ。あの人たち」

マエストロは A、とため息をつくくと、作業を中断させて、店のほうに行った。

気になるから、わたしもついていった。

このあいだも来た、スーツ姿の男の人たちだった。なんとかかんとか開発という、大きな土地開発会社の人たちだ。相手が口を開くまでもなく、マエストロは、

「いや、その気はないので」

と、きっぱり断った。

「まあ、まあ、そう結論を急がずに。今日はいいものをお見せしますよ」

そう言って、男の人たちは持っていたビジネスバッグから書類を出して、完成予想図と書いてある写真のような絵を見せびらかした。

「いかがです？」

「 B しますね」

年配のほうの人が質問して、若いほうの人が答えている。

一見、かなりカッコいいビルだった。うしろから首を伸ば^のして見ていたわたしは、ほんのすこし心がゆれた。

「もしこの土地を売っていただいたら、当社が買いとったおとなりの土地のビルも解体して更地^{さらち}にし、こういう立派なビルを建てます」
白いストライプの入った紺色^{こんいろ}のスーツの男の人が胸を張って言った。

「ご覧下さい、このすてきなデザインのビルを！」

グレースーツの人が言葉をさはむと、ストライプスーツの人が大きくうなずいて、話をつづける。

「その一階の路面店には往来堂さまが優先的に入り、最上階の日当たりのいいマンション二世帯分の優先権をさしあげます。古い外階段などという危なっかしいも

のはもう必要なく、エレベーターが設置され、さらにおたがいの家を行き来できるようなコネクティングドアもつけられますよ」

「便利ですよねえ」

グレースーツの人があいづちを打つ。

「地下には駐車場。そこからエレベーターで上下し、事務所やお店が入り、上階は高級マンションになるのですよ。どうです。すばらしいでしょう?」

ストライプスーツの人がマエストロに向かってにっこり笑うと、グレースーツの人もにっこり笑った。

「すごいチャンスですよねえ」

わたしは、感心しながらふたりを交互に見た。

お笑い芸人のボケとツッコミみたいだなあ。

ストライプさんとグレースさんって呼ぼう。

② マエストロは渋い表情で、完成予想図には目もくれず、うつむいたままだ。うつむいていたのは、しょんぼりしていたからじゃない。ストライプさんの靴をじっと見ていたのだ。わたしはその視線になれているから、すぐにわかったけど。

「あなたの靴、じつに履き心地がわるそうだな。ほら、かかとおかしなすりへりかたをしているでしょう。合わない靴に足をむりやり押しこんでいるからですよ。大事なのは足であって、靴ではありません。足は第二の心臓ですよ」

そう指摘されて、ストライプさんは両肩をくいと上げた。

「ま、そんなことより、この……」

マエストロはストライプさんの話をさえぎる。

「足が痛いのではないですか?」

ストライプさんの営業スマイルが急に消えた。

「……それはまあ、たくさん歩かなきゃいけないので。どうせどんな靴でも痛いし、買ってもすぐダメになるし、拷問みたいなものですよ。もうあきらめてます」

マエストロはどうぞ、と手のひらをイスにむけた。

「そこにすわって、靴と靴下をぬいでみてください」

「いやいや、まさか」

そう否定したわりには、ストライプさんは「じゃ、ちょっとだけ。よいしょ」と言いながらすわって、ふう、と一息ついた。

ただ、すわって休みたかっただけかもしれない。

「ほら、どうぞ」

マエストロに言われるまま、ストライプさんは靴と靴下をぬいだ。

うわっ。わたしは思わず顔をしかめた。

足は真っ赤に腫れていて、あちこちバンソウコウだらけだった。すごく痛そう。

マエストロは、いつものように、お客さんの前で片ひざをつく。

なんだかまるで王様の前にひざまずいているみたいで、わたしはその姿を見るのがあまり好きじゃない。

「こりゃまたひどい。重症だ。よく歩けますな」

ため息まじりに、マエストロが言った。

「はあ。しかたないんですよ。仕事上、歩きやすくてスニーカーみたいなものではまずいんです。まあわたしの場合、スニーカーもムレちゃってダメなんですけどね」

オーダーメイドシューズの値段表を見ながら、ストライプさんが顔をしかめた。

「うわ、高いっ。なあ？」

ストライプさんが横のグレーさんに同意を求めると、値段表をのぞきこんだグレーさんが、大げさな表情でのけぞった。ほんとうにお笑いコンビみたい。

「高いっすね。やはり場所のせいですかねえ」

そんなイヤミを言われて、店長が口をはさんだ。

「あら、そんなことないですよ。地方だって、質のいい革でいいオーダーメイドシューズを作っているお店は、どこもおなじような値段です」

グレーさんはまだ顔をしかめている。

「そうですか。しかしまあ、オーダーメイドの靴なんて、贅沢の極みですなあ。世界的な超有名ブランドの靴とおなじぐらいの値段じゃないですか？」

ストライプさんがそう言うと、マエストロは苦笑いをしながら答えた。

「ブランド名とそのデザインを選ぶか、最高に履き心地がよくて世界にひとつしかない自分のためだけの靴を選ぶか、のちがいですよ」

マエストロ、ちょっとカッコイイ。

でも、ストライプさんは頭を左右に C と振った。あんたぜんぜんわかってないな、みたいな感じ。

「経済的に余裕のある人なら、有名ブランドを選ぶと思いますよ。どこのブランドの靴を履いているか、たがいにすぐにわかるステータスですから」

「ステータス、ですか……」

マエストロは無表情でそう言いながら、足を観察している。

「ええ。ブランドによるステータスは大事です。そりゃ例外もあるでしょうよ。アメリカの首相や俳優さんなんかオーダーに行くっていう、イタリアの小さな工房のオーダーメイドシューズとかですね。この前メンズファッション誌で特集をやっていましたけど、二年待ちでもわざわざ飛行機に乗って作ってもらいに行くっ

ていうんだから、びっくりしましたね」

「ええ、よく存じ上げていますよ」

マエストロはまた無表情でうなづく。

そりゃそうだ。マエストロはそういう工房のひとつで修業していたんだから。思わず言いたくなったけど、だまっておくことにした。

「まあ、そういう店はべつとして、これから先、ますますオーダーメイドシューズのニーズ^{*}って、減るんじゃないでしょうかね。みなさん、そんな時間やお金のゆとりはないですよ。ゆとりのある人は、ステータスを求める。つまりですね、やはり、我々のオフ^{*}ァーがあるうちに土地を売ってしまったほうが賢明^{けんめい}ということですよ」

自信たっぷりにはべるストライプさんに、わたしはイライラしてきた。

③
しつこいな！

と言いたくなったけど、ぐっとこらえた。

マエストロが「……いえね」と、口を開いた。

「戦後の日本はオーダーメイドがあたりまえだったんですが、いまは大量生産です。しかも、一、二年履いたら捨てる。エコレザーといえは聞こえがいいが、石油系の合成皮革がほとんどですから、修復もできず、捨てられても自然分解はされない、燃やせば有毒ガスが出る。ゴミだらけの世の中ですよ。われわれは、信念を持って、四代つづいたこの店でオーダーメイドシューズを作っているのです。なんと来ていただいたところで、わたしの目^④が黒い^⑤うちは、この土地は売りませんよ」
ストライプさんは、すわったまま値段表とおじいちゃん、グレーさんの顔を交互に見てから、小さくため息をついた。それから急に、ストライプさんは表情を変えた。なにか作戦を思いついた、みたいな感じだ。

「まあ、じゃあ土地の話はいちど保留にして、とりあえず記念にひとつ作っていただきましょうか。セミオーダー^⑥ってので十分です。フルオーダーなんて待ってられないし、いくらなんでも高すぎる。デザインも革も、ここにあるものでいいですよ」

マエストロが「待ってられない」というところですか？ 残念そうな顔をしたけれど、そのあとはほほ笑みながら、足のさまざまな部分のサイズを測った。

佐藤まどか『ノクツドワイオウ——靴の往来堂』より

* オーダーメイドシューズ……注文を受け、お客さんの足と好み（革やデザインなど）に合わせて作る靴。

すべてお客さんの好みに合わせることをフルオーダー、あらかじめ決まった形から選んで作ることをセミオーダーという。

* ステータス……社会的地位、身分。

* ニーズ……需要^{じゅよう}、必要。

* オフ^⑦ァー……提案、申し出。

問一 A C に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ほればれ イ がたがた ウ ゆらゆら エ しげしげ オ やれやれ カ ことこと

問二 部①「その気」とはどのような気持ち（考え）のことですか。簡潔に説明しなさい。

問三 部②「マエストロは渋い表情で、完成予想図には目もくれず、うつむいたままだ」について、この時、マエストロは何を考えていたのですか。説明しなさい。

問四 部③「しつこいな！ と言いたくなかったけど、ぐっとこらえた」について、なぜ「わたし」は何も言わなかったのですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 有名ブランドの靴とオーダーメイドの靴のどちらを好むかは、人それぞれだから。

イ マエストロが何も言わないのに、子どもの自分が口をはさむべきではないと思ったから。

ウ オーダーメイドの靴にニーズがないのは、本当のことだと実感しているから。

エ 失礼なことを言う相手に何も言い返さないマエストロや店長に腹を立てていたから。

問五 部④「目の黒いうちは」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 判断力があるうちは イ 自由に体が動くうちは ウ 生きているうちは エ お客さんが来てくれるうちは

問六 部⑤「それから急に、ストライプさんは表情を変えた」について、この時ストライプさんが考えたことの説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 靴をオーダーすることにより、マエストロの機嫌きげんをとって自分の思い通りに話をすすめようということ。

イ 自分の足に合う靴を本当に作ることができるのか、マエストロを試してやろうということ。

ウ 靴なんて高い金額を支払しはらうほどの価値のあるものではないとマエストロに思い知らせようということ。

エ 完成まで時間のかかる高価なフルオーダーよりもセミオーダーの方がニーズがあるとマエストロに教えてやろうということ。

問七 文章全体を通して、マエストロはどのような人物として描えがかれていますか。説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

悪口がどうして悪いのか説明しようとするもうひとつの常識的考えは、悪意のせいで悪いのだ、言う側の心の問題だ、というものです。私たちは、誰かを傷つけてやろう、嫌な気分^{いや}にさせてやろうと思い、あるいはその人をバカにして、軽蔑^{けいべつ}して、悪口を言うことが確かにあります。そして、そのように人の悪意に触れることは、辛くて悲しいことです。悪口が悪いのは、A、悪口で傷ついてしまうのは、言う側の悪意が理由だ、という発想です。

悪意を理由にするアイデアも、日常的な感覚に近いですが、あまり役に立ちません。先ほどと同じように、悪意は悪口の必要条件でも十分条件でもないからです。悪意がなくても、悪口を言うことができます。つまり、悪意は悪口の必要条件ではありません。たとえば、子どもの無邪気^{むじゃき}なことばはどうでしょうか。^①私も、三歳児とか五歳児といった小さな子どもに、「きらい」「くさい」などと言われることがあります。子どもがなぜそんなことを言うかというと、言われた私の反応が面白いからです。子どもたちは、本当に屈託^{くつたく}なく、にこにこそのようなことを言ってきます。遊んでいるだけで、心の底から、楽しい、うきうきとした気分です。言うので、悪意と呼べるほどのものではありません。B、私はそんなことを言われると嫌なので、「そんなこと言わないで」と言います（やめてくれるわけはありませんが）。

周りのことがよく分かっていない、小さな子どもは別の話で、関係ないだろう、と思われるかもしれませんが、しかし、子どものように無邪気に、あるいは子どものように何も考えずに、悪口を言ってしまう大人もたくさんいることもみんな知っています。たとえば、いじめの加害者の中には、本当に自分がいじめているという自覚がない人がいるでしょう。「うざっ」や「きもっ」などと言うとしても、「いじめ」ではなく「いじっているだけ」、なんだったら喜ばせている、と考えているかもしれません。

そのような場合、発言をする側に悪意はありませんが、私たちは悪口を言っていると考えます。つまり、悪口を言うために悪意を持っている必要はないのです。単なる悪口を超えています。差別的発言の中にも同じような例があります。男の人が他の人よりも偉い^{たい}とされる、男尊女卑^{だんそんじよひ}的な社会や、白人の方が黒人やアジア人などより偉いとされる、白人至上主義的な社会に生まれ育った人が、女性や黒人に対して、あなどるような、バカにするようなことを言うときがあります。たとえば、「この人は女性だから（黒人だから）医者には向いていない」といった発言です。

発言を通じて、言った人はひどい偏見^{へんけん}を持っているんだな、ということとは分かりますが、その人に悪意があるかどうかは分かりません。^②むしろ、親切心で、そのようなことを言ったのかもしれませんが。その人は子どものときから、「女の人は医者になれない」と何度も（間違っただけを）教わったので、それを単に繰り返しているだけかもしれません。「黒豆をふっくら煮るコツ」を伝えるのと同じくらいの気持ちで言っているのかもしれませんが。

I

II

しかし、差別的発言はその意図がどうあれ差別的発言です。

（中略）

C 悪意が発言を悪くする原因ならば、「悪気はなかった」という言い訳ひとつで、どのような発言も許されてしまいます。「悪気はなかった」に説得力がないのは、これが白々しい嘘だからではなく、悪気があるがなからうが、発言に問題があるときはある、と私たちが考えるからです。

意図の有無はもちろん行為の III に影響を与えると私たちは考えます。たとえば、「過失傷害罪」とは、そういうつもりはなかったけれども、不注意などで人を傷つけてしまったときに当てはまる罪です。一方、「傷害罪」の方は、人を傷つけてやろうという意図があるときに当てはまります。そして、過失傷害罪は傷害罪よりも軽い罪だとされています。しかし、わざとでないからといって、それが罪でなくなるわけではありません。事故でケガをさせられた人に向かって、「よかったねーわざとじゃなかったんだって!」という人はいないのに、不適切な発言の後に、「そういうつもりはなかった」と言う人が絶えないのは、おかしいことです。

悪口に限らず、ことばを使って何かがなされる時、私たちは隠された意図や本当の動機のみ焦點を当てるわけではありません。私たちの発言にはおおよその型があり、その型にそって解釈が与えられます。お寿司やさんに電話をして「お寿司四人前、サビ抜きでお願ひします」と言ったら、それはお寿司を「注文する」という行為をしています。お寿司が届いた後、「いや、演劇部の練習で、度胸をつけようと思ったただけなんです」などと言っても、こっぴどく叱られるでしょう。その発言は、意図がどうあれ、注文したと解釈されるものだからです。

D、意図や動機など、話し手の心の動きだけに注目しても、悪口がどうして悪いのかやはり説明できないのです。

和泉悠『悪口ってなんだろう』より

問一 A D に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ もし エ というわけで オ なぜなら カ さらには

問二 部①「私も、三歳児とか五歳児といった小さな子どもに、『きらい』『くさい』などと言われることがあります」とありますが、この例によって、筆者はどのようなことを伝えようとしているのでしょうか。説明しなさい。

問三 部a「屈託なく」・b「白々しい」の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「屈託なく」		b 「白々しい」	
ア	こたわりなく	ア	いじわるな
イ	いつわりなく	イ	見えすいた
ウ	えらそうに	ウ	意味のない
エ	たのしそうに	エ	気まずい

問四 ――部②「むしろ、親切心で、そのようなことを言ったのかもしれませんが」とありますが、ここでの「親切心」とはどのような考えに基づいているでしょうか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の方がすぐれているということをはっきりと伝えることで、相手を傷つけようという考え。
- イ 自分が偏見を持つ人間であるということと正直に伝えることが、相手のためになるという考え。
- ウ 自分の考えをあらかじめ伝えることによって、相手も自分の意見を言いやすくなるという考え。
- エ 自分が子どものときから何度も教わってきたことを伝えることが、相手の役に立つという考え。

問五

I	・	II
---	---	----

 に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰がどのような場面で何を言ったのか
- イ どれくらいの人数で発言したのか
- ウ どういう気持ちで言ったのか
- エ 誰をいつ傷つけたのか

問六

III

 に最も適することばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 動機 イ 罪深さ ウ 事情 エ おそろしさ
- ア あなたを傷つけようと思って「バカ」と言ったわけではないのだから、許してあげなさい。
- イ 仕事をさばっていたのはあっちゃんだから、それを注意しようとして「バカ」っていうのは悪くないよね。
- ウ 確かに「バカ」と言っていました。彼女のいやなところを友だちに相談していただけです。
- エ 彼の頭が悪いのは本当のことで、みんなも「バカ」って言っているよ。事実だから言ってもいいよね。

問七 この文章で述べられていることは、次の中のどの発言に反論するのに役立ちますか。適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

三 次の各文の に適する色の名前を、漢字一字で答えなさい。

- 1 恐怖^{きようふ}のあまり ざめる。
- 2 人気歌手の登場で 色い声があがった。
- 3 事件の 幕は政界の大物だった。
- 4 の他人に個人的なことは教えられない。
- 5 昨晚からの大雪で、あたり一面 世界が広がっている。

四 次の 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 リレーのホケツに選ばれる。
- 2 手先がキヨウだとほめられる。
- 3 弟のカンビョウをする。
- 4 セイミツな検査を受ける。
- 5 例をアげる。

